

★ まちづくり ★ ニュース

★ ホームページ

<https://tokiwadai.net/>

281号

2025年9月27日

★ 常盤台の景観を守る会

常盤台まちづくり委員会

事務局 島田晴子

tel・fax

3960 - 3869

— 都心低空飛行問題について —

○ 高裁の判決は10月7日

7月15日(火)1時半101号法廷で1人の原告の陳述を弁護士が代読、もう1人の西五反田在住の原告がこの5年間でいかに生活・生存の権利を侵害されてきたかを訴え、法廷では禁じられている拍手も起きました。裁判長から判決は10月7日(火)11:00と告げられました。今度こそちゃんとした人権を尊重した判決を期待したいと思います。

○ ときわ台駅90歳に

1935年(昭和10年)10月にときわ台駅は「武蔵常盤」という名前で開業しました。

東武鉄道は西板線という貨物中心の線路を作るためこの付近を買上げていましたが、その計画が中止になったので、しばらく遊覧飛行の飛行場に貸していた土地を分譲住宅地とすることにしました。常盤台住宅地の誕生です。

武蔵常盤駅は住宅地の住民が利用するために新設された駅で、分譲販売の事務所を兼ねていたと思われます。

駅名は当時の書き方で、右から左へ武蔵常盤駅とあったはずですが、残念ながらその駅名での写真がいまだに見つかりません。この「まちづくりニュース」200号に今は東向島の東武博物館所蔵の記念スタンプを載せましたが、そこには確かに右書きの駅名が認められます。一方、南口の駅舎の竣工式の写真では「武蔵常盤」の旧名ではありますが左書きになっています。そして北口も南口も直ぐに平仮名の「ときわ台駅」となるのです。

10年前、80歳のときわ台駅を祝って守る会は80本の花を乗降客に渡しました。今年はどんな祝い方をしようか考慮中です。

○ 下北沢線路街のまちづくり 見学して学んだこと

小田急線の東北沢—下北沢—世田谷代田の三駅間の線路を地下化することで生まれた元線路の街を見てきました。踏切の立体化が大きな問題になっている常盤台に参考になる事例です。

地下に路線を沈めてしまえば地上には大きな空間が生まれます。そこに住民の意見を尊重して、若い世代も活躍し、高齢者にも優しい街が出来上がっていました。至るところにベンチが設けられていることでも解ります。また道の両側は何十人というボランティアが世話をする草木が気持ちよい空間をつくっていました。

チェーン店は皆無で、小さな起業家が挑戦できるような小規模な店を中心とし、それらはビルの中を間借りしているようです。

立体化は確かに避けられない問題です。あの踏切が高架となるか地下化となるか、それによって常盤台は劇的に変化せざるをえないでしょう。具体的にはどうなるのでしょうか？

高架案では、ホームから地上へ降りるコンコースのため、先ず常盤台が誇る駅前ロータリーのヒマラヤ杉やケヤキが無くなります。

周りの商店は老舗であろうとチェーン店であろうと移転を迫られます。今赤字であえいでいる商店があるとして、高層ビルを建てることで儲けようと思うなら逆効果になるでしょう。

地下にするとどうなるでしょう。地上は今とさして変りはないと思われます。駐輪場は駅の近くに設けることが出来るでしょう。

住民と鉄道会社と行政が良い街を作ると同じ目的で手を組めば、緑道や自転車用道路、新しい商店や設備など、理想に近いまちを作り出すことができると実感しました。

大丈夫なのか？

大山のタワマン計画

今、大山や上板橋で次々とタワマン計画が進められています。

大山のタワマン計画四棟のうち、二棟はすでに完成していて、販売されていますが、一億五千億円もの価格のためか、売れ行きは苦戦している様子です。

先日、これから建設されるピッコロスクエア周辺地区の事業計画の「変更版」が公表されました。それによると総事業費は四百八十二億円から六百三十一億円に増え、公的補助金も百五十八億円から、二百五億円に増加しています。

この再開発でできるマンションは五百七十一戸の予定で、一戸当たり三六〇〇万円もの税金で成り立つマンション計画って何なのだろうか？と疑問になります。

この計画でも、実際に建設となると費用はさらに増える可能性もあります。今以上に税金投下が増す事態にならないことを願っています。

S・T

園芸で不用の土の回収・再利用

二七六号でも触れましたが、植え替えなどに出る廃土の始末が困りものです。三鷹市は二カ所に集積所を設け、四月から二、一トンも集め再利用しているとか。足立区や品川区でも取り組んでいるそうで、板橋区もぜひ検討してほしいと思います。

お店紹介(1)

「鮎兼」

駅前で昔からお総菜やウナギを売っているお馴染みのお店が「鮎兼」さんです。土用のなんとやらで蒲焼きを食べた人もいるでしょうから、お店紹介のトップは鮎兼さんにしました。

大正五年、大塚北口の白木屋の前で初代の兼吉さんが開業しました。淡水魚を扱うので鮎、名前の一字をとって「鮎兼」としたそうです。城北空襲で焼け出され、戦後の昭和二十年に今の所に越してきました。

減多に自動車も通らないころ、駅側の道路にまな板を出してウナギをさばいていたのが初代のお爺さんでした。子供たちは上板橋小学校からの帰り道で、お爺さんの捌く腕前を見たり、バケツの中のドジョウが浮いたり沈んだりするのを見て込んだりしていたものです。

自慢はウナギの蒲焼きです。伝来のタレを付けて大3,000円、小2,800円ぐらい、ご飯を付けたお弁当でも3294円です。納得の美味しさ。土用の丑の日でなくても時々は滋養のためウナギを食べましょう。定休日木曜。冷凍のウナギを使う店も多い中で、鮎兼は鹿児島産の活鰻を自分で捌いているのが自慢。都心に出なくても、こんな近場で専門的な蒲焼きが手に入るのですから私たちは幸せです。

今のご主人は三代目、丸顔に丸眼鏡というのが代々の鮎兼顔(失礼)?なのです。四代目ももう少し太れば伝統の?丸顔になりそうです。

常盤台公園のはなづくり

花壇はチューリップの春花壇の後、ネコジヤラシやヤブカラシにすっかり占拠されています。

角の花壇だけノツポさんが手入れをしているので紅いサルビアと黄色いマリーゴールドが咲いています。

例の皇帝ダリアは数本が生き残っている感じで、子供に踏み折られたり水やりや雑草取りが充分でなかったりで今年も咲くまでに至らないかも知れません。申し訳ない!

旧図書館跡地の行方次第で私たちの活動も花壇のありようも変わってくるので、来年チューリップを植えられるかどうかは気になっています。板橋区に問い合わせるとまだ何も決まっていけないと言う返事なので、今年もチューリップの球根は注文済みです。

九月半ばに天祖神社のお祭りに合わせてでしょうか、駅前ロータリーの花壇が植え替えられていましたが、また手入れがされずに枯れてしまわないか心配です。

公園の方はもっと悲惨な状況ですが、涼しくなるにつれてポチポチとヤブカラシを取ったりし始めています。十一月始めには何とかなるでしょう。所々にハマユウの類が可愛い色で咲いているので、近年のような酷暑の中の花壇はたとえ自動灌水設備があったとしても難しいと思います。

